

中国游记

2012 年 10 月 25 日～11 月 7 日。赤線部が、今回、歩いた道である。以下、その印象を記す。



関空から上海経由で西安咸陽国際空港に着き、そこから高速バスで漢中へ（約 4 時間）。

西安空港から 16 時 30 分発のバスに乗る予定だったが、飛行機が 50 分遅れ、18 時発のバスに乗ることになり、23 時頃、漢中に着いた。

バスの料金は 112 元（約 1456 円）。

長距離バスの駅からホテルまでは、かなりの距離があり、時間も遅いので、ホテルまではタクシーに乗るしかなかった。（料金は 11 元）



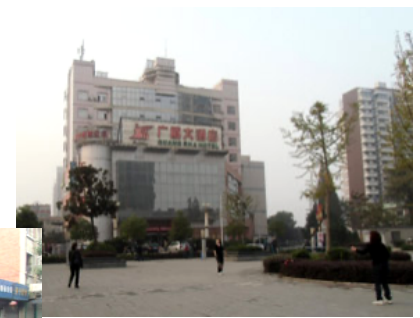
漢中行き高速バス（バス）

ホテルは料金 145 元。
トイレが壊れていたが、
もう遅いので、部屋は、
かえてもらわなかった。



10 月 26 日（金）

朝早く、出勤する人たちにまじり、
歩いて「漢中博物館」へ向かう。



ホテル前の広場で、早朝から、
バドミントンをする人たち。

漢中博物館（古漢台）

「古漢台」は前漢の高祖劉邦が漢中にいた頃の
邸宅である。

秦朝が滅んだ後、西楚霸王の項羽が劉邦を、
漢王に封じた（左遷）。左遷された劉邦によって、
紀元前 206 年、この邸宅は建てられた。



漢中市博物館（古漢台）正面

1958 年「古漢台」の中に漢中博物館が建設された。
1971 年、褒斜ダム建設により、褒斜道に刻された、
詩文のほとんどが水没してしまったが、
その内の 13 の刻石を切断し、漢中博物館に移した。

褒斜道は、関中と漢中の山を貫く栈道である。

南口を褒谷と言い、褒城県境、今の漢中市の北約 16km にあり、
北口は斜谷（郿県にある）と言うことから、「褒斜道」、
また「褒斜栈道」とも言われる。

戦国時代から掘りはじめられ、全長約 235km、
何箇所かにトンネルがある。

その南端にあった石門トンネルは、長さ 13.6m、幅 4.2m、
北側の高さ 3.75m、南側の高さ 3.45m で、「小石門」とも呼び、
世界最古のトンネルと言われている。

この洞内の壁と石門の南北の断崖に、この大工事に感動した
漢魏時代の高官や、文人たちの詩文を刻した摩崖石刻があった。
その中の珍品が「石門刻石」とも言われる「漢魏十三品」である。
博物館には、栈道と石門の復原模型もあったが、撮影禁止であり、
ガラス張りで、よく見ることはできなかった。



啓功書の門標（下手な、魅力のない書だ。これが大家の書か？）

開館時間：8 時半～17 時半、月曜休館

入館料 30 元（パスポートを見せると無料）



石門風景区 再現された石門と褒斜栈道



漢中石門棧道風景区 西門

漢中博物館の近くからバスに乗ると、30分ほどで石門風景区に着く。(バス1元)
ダム湖に沈んでしまったが、復元された、石門や棧道を見る時間がなく、西門の前まで来て、引き返すことにした。バスは、頻繁に往復しているようであった。

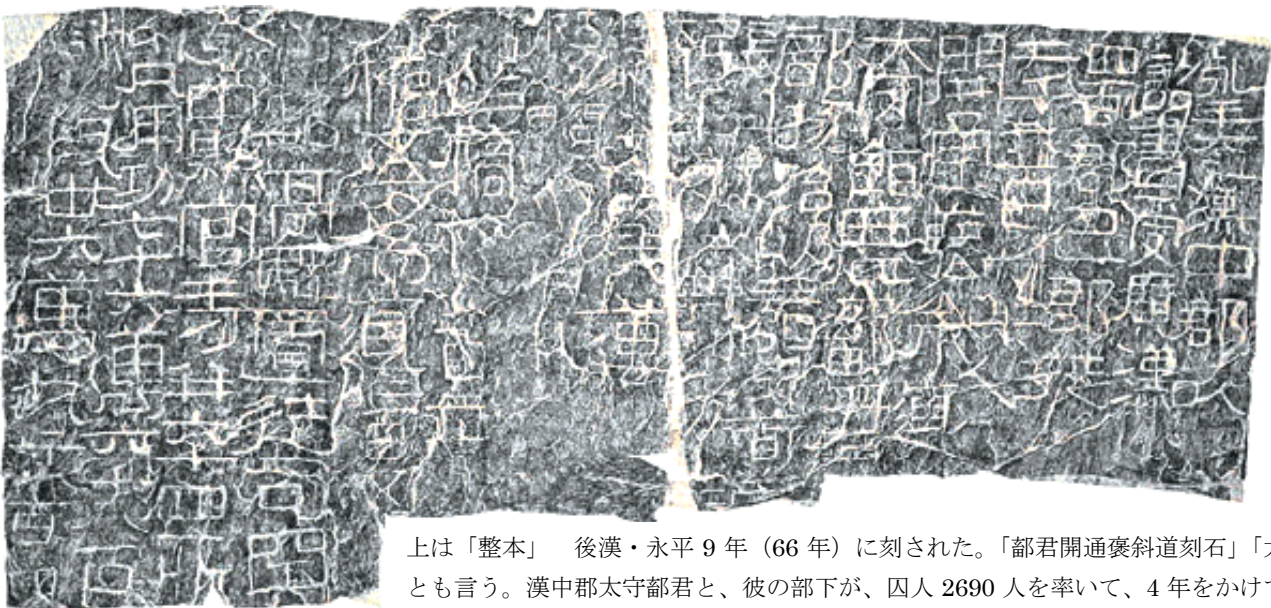
石門十三品

- 1品、「石門」碑 2品、「郤君開通褒斜道刻石」摩崖
3品、「郤君碑碣文」摩崖 4品、「李君表」摩崖
5品、「石門頌」摩崖 6品、「楊淮表記」摩崖
7品、「玉盆」摩崖 8品、「石虎」摩崖 9品、「袞雪」摩崖
10品、「李苞通閣道」摩崖 11品、「潘宗伯、韓仲元」摩崖
12品、「石門銘」摩崖 13品、「重修山河堰」摩崖

「開通褒斜道刻石」



「漢台碑林」入口



上は「整本」 後漢・永平9年(66年)に刻された。「郤君開通褒斜道刻石」「大開通」とも言う。漢中郡太守郤君と、彼の部下が、囚人2690人を率いて、4年をかけて、棧橋を架け、トンネルを開き、車両が通れるよう、褒斜道を切り開いた。この開通を記念し、郤君らの功績を讃えた刻石である。159字、93~126×254cm 全16行。石門近くの褒河の西岸の崖に刻されていた。古隸といわれるが、篆書から隸書に移る過渡的書体である。



「開通褒斜道刻石」部分 拓本



「開通」部分 拓本



「石門十三品陳列室」入口



「開通褒斜道刻石」の拓本と原石

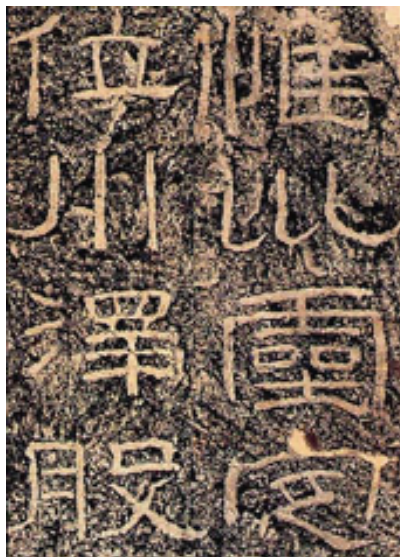
「石門頌」

後漢・建和 2 年（148 年）に刻された。八分隸。
204×185cm 22 行、満行 37 字、「楊孟文石門頌」とも言う。

「開通褒斜道刻石」の時代に開通した道路が壊れ、
不通になっていたのを、再開した楊孟文と王升の功績を頌えたもの。
石門洞内の西壁の中央に刻されていた。



「石門頌」整本



冒頭部分 拓本



陳列室内部 ガラスが反射して見えにくい。
20 年ほど前の写真を見ると、ガラスはなかったことが分かる。



題額部 拓本



1988 年頃の「石門十三品陳列室」

「楊淮表記」後漢・熹平2年（173年） 古隸風の八分隸、
 190×62 cm 7行、満行26字、^{しれいこうい}「司隸校尉楊淮表記」とも言う。
 楊孟文と同郷の卞玉が「石門頌」を見て感動し、楊孟文をしのび、
 その孫の楊淮と楊弼を顕彰したもの。



冒頭部分 拓本



部分 拓本



「楊淮表記」整本

「石門銘」

北魏・永平2年（509年） 北魏の楷書
 全28行、満行22字、
 典籤と王遠によって彫られた。
 戦乱で廃道となっていた褒斜道を復旧し、
 工事が終了した永平2年1月に、竣工を記念して、
 石門洞内に刻されたものである。石門の歴史などが
 彫られている。



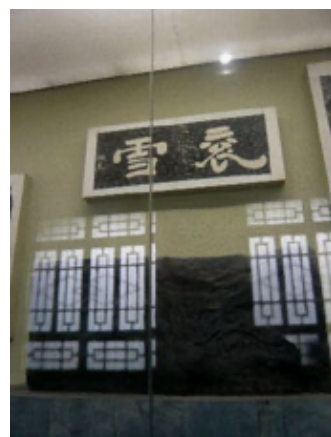
「石門銘」部分 拓本

「^{こんせつ}袞雪」隸書（袞雪とは水しぶきが雪片のように舞う様のこと）

唯一、魏の曹操の書と言われている。急流の飛沫が踊る様を表したとされる。



この時代は、紙がまだ一般化していない時代だから、じかに、岩に書丹して彫られた
 と想われる。また、道や隧道（トンネル）を造ることは、大工事であり、軍事だけ
 でなく、商業など、人びとの暮らしに、利すること大であっただろう。



漢中の「長途汽車站」14時38分発の高速バスに乗り（80元）、
「西安城南」に18時20分頃着、路線バス（1元）で「南門」へ。
ホテルにチェックインして、食事と、夜の南門を見るため外出。
明日は皆さんと合流して西安碑林へ行く。



南門の広場で踊る人びと（9時半頃）ほとんど病気だ！

27日～29日に、皆さんと歩いた西安碑林博物館、書院門、小雁塔、明代城壁、西門、鼓楼、鐘樓、兵馬俑博物館、陝西省歴史博物館、大雁塔、洛陽の龍門石窟、白園などについては、前回のもろもろ塾で詳しく解説しましたから省略します。

龍門石窟で皆さんと別れ、ひとり、太原へ向かった。

29日14時半頃、バスのK81（1.5元）に乗り、15時過ぎに洛陽駅に着く。
17時発の高速バスで、太原に23時15分着（約6時間、144元）



太原行き高速バスの中。寝台車だった。

30日（火）太原は傅山の故郷に近く、「晋祠」のある所。

「晋祠」と「晋祠」の中にある、「傅山記念館」を観ることが目的である。
晋祠公園まで太原市内から、バスで約1時間余（2元）。

「晋祠博物館」

晋祠公園の一番奥に、博物館はあった。
外国人はパスポートを見せると、
入館料が半額である。（35元）。

「晋祠」は周武王の次男である叔虞を
記念するために造られた祠である。
紀元前11世紀、唐国の諸侯に封ぜられた叔虞は、晋国の水を利用して、農地の水利を行い、農業を発展させ、唐国の人びとの生活を安定させ、豊かにし、その後の700年余りの、国家安泰と繁栄の基礎を築いた。

叔虞の死後、人びとは、彼を記念するため、この地に祠を造り、彼を祭って、「唐叔虞祠」と名づけた。その後、晋の水に因んで、国号を晋と改め、唐叔虞祠も「晋王祠」、略称「晋祠」と変えられた。



晋祠公園



晋祠博物館

唐の太宗（李世民）は高句麗遠征の帰り、昔、父とともに挙兵し、武運を祈願したこの晋祠に立ち寄り、天下統一を果たした今、神に感謝して、自ら選書し、碑を建てた。それが「晋祠銘」である。



「雲陶洞」傅山隠棲の場所。
この洞窟内で、傅山は5年間、香を焚き、読書し、書作し、薬を搗き、生活したという。ドアの向こうに洞窟があるようだ。一般公開していないとのこと。

「晋祠銘」

唐代・貞観 20 年（646 年）1 月選書、貞観 21 年 8 月立碑。

撰文・書ともに太宗。行草書。

碑身は 195×120 cm、28 行、満行 50 字、題額は飛白体で 3 行。

最古の行書碑であり、現存最古の飛白体による題額である。

この碑以後、行書碑が流行することになった。

書風は、太宗が心酔した、王羲之風（上広下狭）の行書体である。太宗の書の真を伝えるものとしては、この碑の他に「温泉銘」がある。

「晋祠」の唐碑亭内にあるらしいが、ぼくは、長い時間、珍しい建築物や鳥や大樹を見ながら、グルグル祠内を巡ったが、ついに、実物を見ることができなかった。

「^{ふさん}傳山記念館」

晋祠博物館の中に傳山記念館はある。

入ると、大きな（縦 160 cm くらい）傳山の肖像画軸があった。

つづいて、書の長条幅が 30 点、絵画の条幅が 8 点、

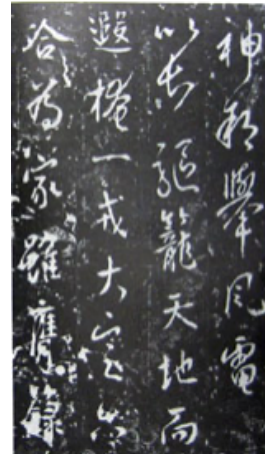
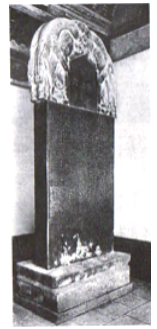
書籍類が数点展示されていた。ほとんど見る人はいない。

傳山（1607～1684）は太原市の北にある陽曲県の出身。

展示されていた条幅には、王羲之を臨書したものが数点ありました。書風は思っていたよりも、穏やかで、優美であった。



題額部 飛白体



拓本 部分



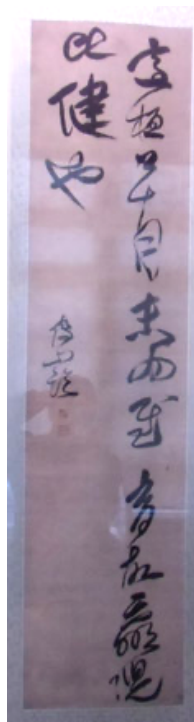
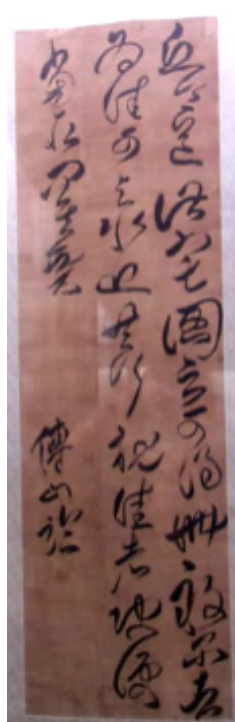
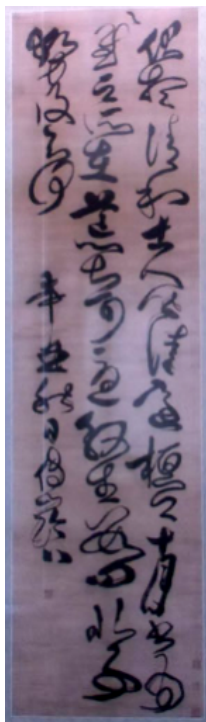
晋祠銘 整本



傳山記念館 正面



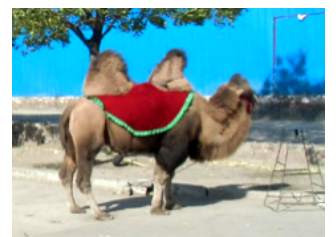
傳山記念館の中



王羲之の書の臨書群 「淳化閣帖」にある王羲之の書を臨書していると思われる



傳山肖像画 部分



駱駝の乗り物

太原市で予定していた、「山西博物館」と「山西省芸術博物館」は、見る時間がなくなり、高速バスで鄭州に向かう（バス代 150 元）。予定のバスの出発が 3 時間遅れ、19 時発になり、（約 8 時間かかる）しかたがないので、傅山が発明したという、太原名物の刀削麵^{ダージョオミェン}を食べに行った。それは、駅前の、どんな店にも、あったが、たいして美味しいものではなかった。研究不足である。店が悪かったのだろう（「麵は山西にあり」と言うそうだが）。鄭州までのバスの中から、黄土高原を観察できると期待していたが、真暗闇で月と星しか見えない。そこには、日本で見るのと、まったく変わらない月があった。鄭州のホテルには翌朝 3 時にチェックイン。



山西博物館



鄭州行き高速バス 寝台車ではなかった。



鄭州駅前はホームレスの天国であった。

31 日（水）

鄭州東 12 時 50 分発の高速鉄道（G 列車 2 等 245 元）で武漢までのチケットを買っていたので、寝不足でもあり、河南省博物館をあきらめて、一か八か、黄河を見に行くことにした。

ホテル（鄭州駅前）の前から、游 16、9 時 15 分発のバスで、黄河風景区へ（5 元）10 時 22 分着。

（トラム 20 元、入場料 30 元）写真を撮って、すぐ引き返す。

游 16 路に乗って、来た路を戻る、時間が危うくなってきたので途中下車して、タクシーを拾い、鄭州東駅まで飛ばしてもらう。

（タクシー代 26 元）発車 5 分前に列車に滑りこんだ！

窮地に立ったときの判断力、決断力と実行力が運命を決める。

武漢で南昌行き 16 時発の D 列車に乗り換え（2 等、104 元）

南昌に 18 時 46 分に着く。鄭州から南昌まで 860km 余を 6 時間ほどで来たわけだ。

明日の、南昌から黄山までの列車の切符が、まったく取れない。

予定を変更。南昌で楽しみにしていた「八大山人記念館」と

「江西省博物館」をあきらめて、朝一番に、ホテルからバイクの後ろに乗り、徐坊汽車站へ（15 元）

7 時 50 分発の景德鎮行き的高速バスに乗り（80 元）、あるかどうか分からない、

景德鎮発、黄山行きのバスがあることを信じて、南昌を発った。



はるか彼方に対岸が見える。イエローリバーであった。



見られなかった「八大山人記念館」



見られなかった「江西省博物館」



揚子江を渡る列車の窓から。

鄱陽湖の横を通り、3時間半ほどで景德鎮に着いた。
 バスはあった。黄山行きのバスは13時40分発であった。(60元)
 駅裏にあった、大きな磁器の街を歩く。
 黄山には17時10分頃着いた。
 バスの黄山駅は火車站からかなり離れた
 所にあったので、そこから路線バスに
 乗換えて、火車站前まで乗り(1元)
 駅前のホテルにチェックイン。
 夕食を食べに外に出る。
 できるだけ大きなレストランを選び、
 毛豆腐の鉄板焼を食べることにした。



景德鎮火車站の裏は巨大な磁器街であった。



鄱陽湖 (中国最大の淡水湖)



徽州料理「毛豆腐」の鉄板焼 (20元)

11月2日(金)

火車站前から12路(バス)で昱中花園で下車(5分、1元)。
 10分ほど歩いて老街へ。老街には黄山硯と黄山茶の店がひしめいていた。
 黄山硯は歙州硯の一種である。
 筆や安徽宣紙、紅豆や翡翠など、
 何でもある巨大なお土産屋街であった。
 新安江を眺めたりして、しばし町を散策。



老街の入口



新安江



老街 香辛料の店



老街 お茶屋



近づいてみると、汚い川だった。



老街 硯店



老街 紅豆を売っている。



老街 篆刻屋



老街 文房四宝の店



老街



老街 樂器屋

老街でお土産などを買って、黄山の麓の湯口へ向かう。
火車站前から、湯口行きの小型バスに乗る。

(屯溪—黄山、20 元)

13 時 44 分発～14 時 40 分頃着。

ごみ溜めのようなバスで、
女の車掌も猿が島の猿のようであった。
黄山駅のことを屯溪とも言う。
黄山の登山口や、杭州行きのバス駅を
確認したり、杭州行きのチケットや、
明日の登山のための食料品を確保するため、
湯口の街をうろつき、明日の用意を終えて
から、2 連泊するホテルのレストランで、
夕食に、徽州名物の「臭桂魚」(68 元)を
食べる。臭桂魚は発酵させたケツギョの
揚げ煮らしい。長さ 30 c m ほど。美味。



黄山駅前発湯口行きバス



湯口のバス站 長距離バス站でもある。



臭桂魚



丁寧に食べました。



湯口

ホテルやスーパーや
超市や土産物屋やレ
ストランなどが、たく
さんある。

11 月 3 日 (土)

5 時半に慈光閣行きのバス停 (黄山風景区) へ向かう。

バスは 6 時前に発車 (9 元) 慈光閣に 6 時 17 分着。

6 時半登山開始。

入山料はパスポートを見せると半額 (115 元) だった。
ロープウェイだと 8 分ほどだが、3 時間ほどかけて、
歩き、疲労骨折がどこまでもつか実験。

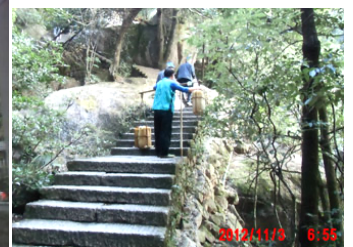
黄山に着くまでに相当歩いて来たが、
ここでだめになるようなら、
中国など、二度と来るものではない、
と感じ、自分を試すことにした。

笑うなら笑え！

山水画家の聖地、
その光を浴び、
その風に包まれて、
空気をいっぱいすいこんで、
眼をカッと開いて、
一步一步、また一步、
歩けることは幸せである。



慈光閣



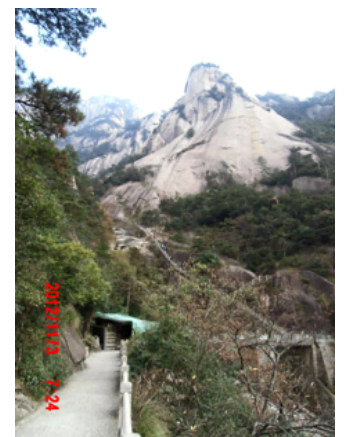
水か何かを運んでいる人。



天都峰は閉山中だった



親切な人が写してくれた。



老道口から天都峰 (1810m.) へ



玉屏站



赤い木の実に、山もやさしい。

慈光閣から歩いて、予定どおり、
2 時間ほどで、天都峰に着き、
玉屏峰へ。玉屏站から迎客松を見る。

玉屏站はロープウェイの駅だから、人だらけである。
 迎客松を見、天都峰は閉山中だから、
 黄山の最高峰、蓮花峰へ向かう。
 蓮花峰へ人の行列がつづく。
 一人しか通れないような道を行く、傾斜は、
 ひどい所で、80度くらいはあるか。
 山頂は狭く、人が群がり、やっとのことで、
 写真を撮った。
 風が冷たい。急にガス発生、が、すぐ晴れる。

上り下りをくり返ししながら、二番目に高い、
 光明頂へ向かう。
 人がひしめき合って歩いていく。

途中で、昼食。
 1時間以上歩いて、光明頂に着く。
 この世のものとは思えないような景色が広がっている。

飛来石を見て、西海大峡谷をぬけ、北海賓館に向かう。
 北海賓館を過ぎ、ロープウェイの駅である白鵝嶺に着く。
 すでに15時前になっていた。
 ここから歩いて下山すると、3時間はかかるだろう。
 湯口行きのバスの最終便は17時である。
 ここまでの途中、とくに下りのとき、
 脚が、がくがくしだして、
 やっぱりだめだったか、と感じたが、
 どうゆう訳か、何度か、がくがくを繰り返している間に、
 何も感じなくなり、歩いて下山できると思っていたが、
 時間がたりなくなって、仕方なく、
 ロープウェイに乗ることになってしまった。
 ロープウェイからの景色は良かったが、
 ゆっくり歩きながら、山を感じたかったなあ。

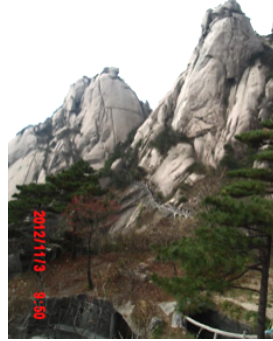
16時前には、湯口（集散中心と言う）
 に着いた。
 明朝早く、この同じ駅から、
 高速バスで杭州へ向かう。
 次の日の朝、脚の疲れは、
 すっかり回復していたのには驚いた。



蓮花峰へ人の列



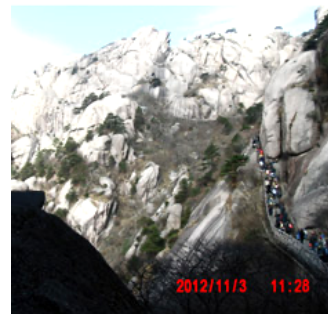
迎客松



蓮花峰へ



蓮花峰へ



光明頂へ（1,860m） 人の列



黄山の最高峰
蓮花峰頂上（1,864m）



光明頂から



光明頂へ人、人、人



白鵝嶺駅からロープウェイで下山



飛来石



ロープウェイ（80円）



バスで湯口（集散中心）へ



雲谷寺站に着く

黄山は人だらけで、聖なる山ではなかったが、黄山の本当の姿は、観光程度では見られないだろう。
愚かしい観光旅行は、やめるべきであった。自然のためにも、心ある人のためにも。

11月4日（日）

湯口 6 時 50 分発の杭州行き高速バスで杭州へ（100 元）

16 分遅れて出発。杭州汽車西站に 10 時 40 分ころ着く。

路線バスで「^{せいこ}西湖」の近くまで行く（3 元）

西湖の「^{はくたい}白堤」を歩く。

人だらけである。天下太平の中国である。

乞食業の人が、たまにいるが、

みな、楽しそうである。

^{せっこうしょうはくぶつかん}
「浙江省博物館」

白堤を渡ったところにある。無料。

書画館は改修中であつた。

何紹基や傅山の書、黄公望の「富春山居図」

などを見る予定であつた。残念！

その隣に「西泠印社」がある。



杭州行き高速バス



白堤



西湖で船遊びする人たち



浙江省博物館

^{せいれいいんしゃ}
「西泠印社」



西泠印社の外門

西泠印社は篆刻を中心とする学術団体であり、企業である。
また、ここは庭園としても有名である。
中国における篆刻芸術の中心であり、ここの印泥を使っている
人も多いだろう。1913 年初代社長に、篆刻家の呉昌碩が選ば
れている。韓国の書道愛好家の団体などが来ていたが、観光化
されて、20 数年前に来たことがあるが、その時から、バカ高
い印材などが売られ、くだらない所になっていた。



ギャラリー



鄧石如像

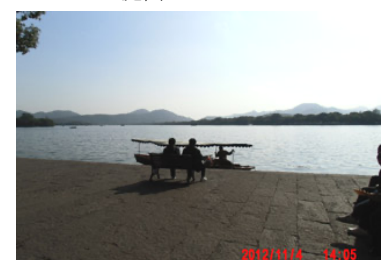


庭園

^{そてい}
「蘇堤」を歩いてから、大きなホテルか
レストランで、蘇東坡が考案したという、
浙江料理、杭州名物の、^{トンホーロー}東坡肉を
食べようと思っていたが、
食べそこねてしまった。残念！



蘇堤



白堤から蘇堤を見る

蘇堤を渡り、三台、路線バスを乗り継いで、^{せんとうこう}銭塘江を渡り、杭州南駅へ。
19時50分発のD列車で蘇州へ（80元）蘇州北に22時前に着いたが、
蘇州駅前から、夜1の路線バス（2元）があり、
ホテルの近くまで行くことができた。
懐かしい蘇州である。



バスの窓から見た、銭塘江

11月5日（月）

天気は快晴！歩いて「滄浪亭」へ。

「滄浪亭」（世界遺産）

蘇州の四大庭園の一つ。

蘇州で最も古い庭園である。

パスポートを見せると半額（7.5元）

閑で、鳥の声がして、樹木におおわれ、
はじめて、ほっとした。

^{ろうそう}漏窓は蘇州で発達したといわれ、窓枠の中
に模様をくりぬいたものである。

その他、空窓（模様のない窓）、花窓などがある。
回廊は緩やかな曲線で造られている。「回廊」中央の築山を回廊が囲んでいる。

唐末に呉越広陵王が造営したものを、
北宋の詩人蘇舜欽が買い取り、改築
したといわれる。滄浪亭の名は、
屈原の詩から取られたという。
当時の庭園の広さは、現在の広さの
6倍もあったらしい。



周りを運河が囲んでいる。



滄浪亭 入口



築山



さまざまな竹が植えてある。



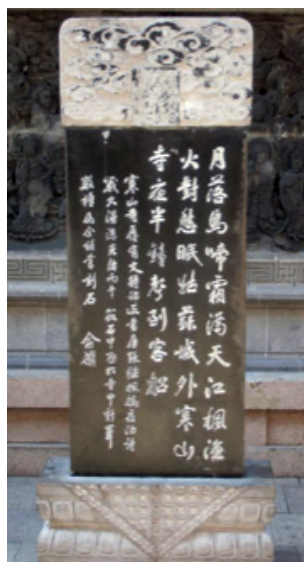
不思議な模様の漏窓

^{かんざんじ}「寒山寺」

^{かんざんじつとく}寒山拾得の故事で有名な寺。

唐の詩人 ^{ちやうけい}張継の詩 ^{ふうきやう}「楓橋夜泊」
の石碑がある。

入場料 20 元。蘇州駅前からバスで 1 元。
寒山拾得のゆかりの寺とは思えないほど、
観光客（主に団体）だらけで、うるさく、
何もかも、けばけばしく、下品、
土産物も高価で、
仏の慈悲も金しだいといったところか。
鐘は有料で撞ける。
趣のある鐘の音が聴こえるなあと、
喜んでいたら、金の音だった。



楓橋夜泊の詩碑



寒山寺入り口



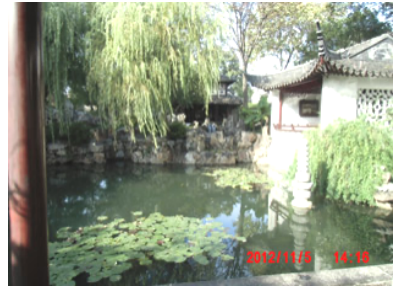
鐘楼



五重塔

バスで 留園へ (1 元)

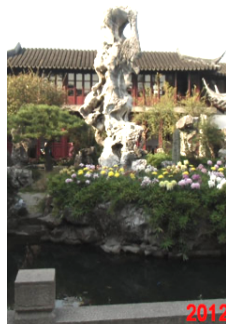
「留園」(世界遺産) 国宝
中国の四大庭園の一つであり、
蘇州の四大庭園の一つでもある。
原型は明代に造られはじめ、清代に完成した。
政府高官の徐泰時が造った。
自然よりも、建築物を主体にした造園である。
拙政園と対極にあるといわれる。
パスポートを見せると、半額 (15 元)



留園の漏窓と空窓



竹林の道



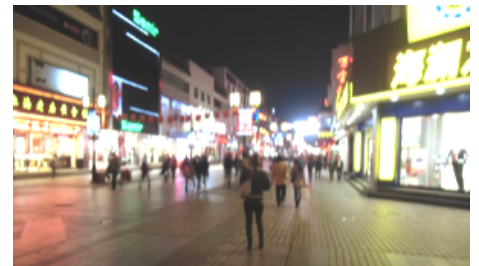
巨大な太湖石



明日の上海行きのチケットを買いに蘇州駅によってから、ホテルにチェックインし、夕食のため外出。
途中、福の字を逆さに貼っている家を見た。



街は若者たちで、あふれていた。蘇州はスッキリしている。
人びとも穏やかで、きれいな感じがする。
「すき屋」や「ファミリーマート」もあり、繁盛しているようだ。
レストランでは、大きなウェットティッシュも出たし、お茶も出る。
杭州はすべてが汚かった。大違いである。



11 月 6 日 (火)
朝早く玄妙観近くのホテルを発ち、歩いて双塔寺へ。



玄妙観



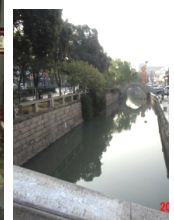
通勤風景



小石の歩道



うどん屋の看板か



運河

「双塔寺」

パスポート見せると半額（4元）
地域の住民らしき人たちが、
境内で剣舞や太極拳をしていたが、
観光客はいなかった。
歩いて碑刻博物館へ。



双塔寺



回廊に石像などが展示してある。



面白い狛犬

「碑刻博物館」

無料。
見るほどのものはなかった。
バスで蘇州博物館へ（1元）



蘇州碑刻博物館



回廊にある、碑版や碑。



バナナ 2 元

「蘇州博物館」 無料。

今日から「沈周展」が始まったせいか、無料のためか、
人だらけである。
写真は自由に撮れる。



沈周の書は、どれも黄庭堅風。
絵画は、繊細で、書も細やかな
感じがするが、黄庭堅の強さが
ない。

沈周は文徵明の師であり、
呉派の開祖といわれる。
これほどの数の沈周を見たのは
はじめてである。

写真が上手く撮れなくて残念！
古代から清代までの土器や陶磁器
もたくさんある、きれいな博物館だ。



沈周 扇面



沈周 石榴のスケッチ



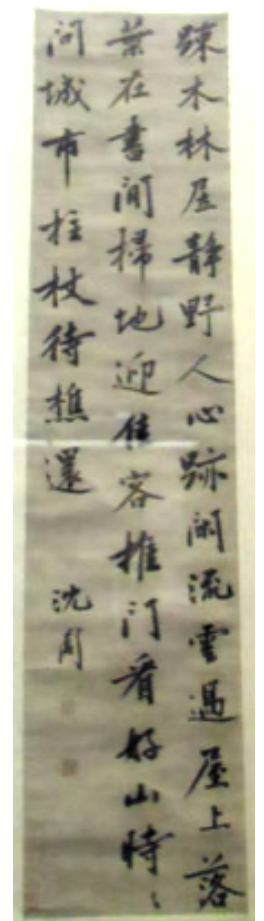
明代の青花瓶



博物館の中庭



博物館前



沈周 条幅

博物館のつづきに、太平天国の記念館である「忠王府」がある。
太平天国の乱は1851年に江西省に起こり、1864年に終わった。
蘇州は1860年に陥落し、太平天国軍の忠王の李秀成がここに、
王府（本部）を置いた。もとは三国時代の呉の郁林太守の邸だった。



忠王府を出て、隣にある拙政園へ。

「拙政園」(世界遺産)

パスポートを見せると半額（25 元）
中国四大庭園の一つ。蘇州四大庭園の一つ。
蘇州最大の庭園で5万㎡あり留園の2倍以上。
明代に官界に失望した御史王献臣が、
故郷蘇州に戻り、庭園を造ったのが、
始まりだとされている。



運河 去年、脚を引きずりながら乗った舟の、船着場。運河は改修中で、船頭さんたちの姿は見えなかった。

拙政園は中園・西園・東園に分けられるが、
見所のほとんどが中園に集中している。
全体の60%が池で、
自然との調和を理想とした、
明代庭園の典型である。



広くて、のびのびとした、
優雅な庭園である。
広すぎて、充分見ることが、
できなかったのも、
再び訪れたいと思う。



拙政園の近くにある、蘇州四大庭園の一つの、
獅子林をあきらめて、虎丘へ向かう。
蘇州駅に戻り、駅前から虎丘行きのバスに乗る（1 元）



「虎丘」

料金 20 元。
春秋時代の呉王夫差が、
父の闔閭を葬った陵墓。
東洋のピサの斜塔といわれる、
大きな塔を見に来ただけである。
運河がきれいであった。



食べたいなあ

バスで平門東で降り、「唐寅旧居」を訪ねる途中、
平門橋の上から城壁の跡を見る。
唐寅の旧居は訪れる人もなく、寂れて、
早く閉館するのか、閉まっていた。残念！

運河とゴンドラ



平門橋から見た城壁跡。

ホテルにチェックインして、夕食のため外出。
ついでに、北寺塔を見に行く。
夕食は蘇州の蟹を食べる（2匹で38元）。
ビールは蘇州のビール。
ビールは、あまり美味しくなかった。



北寺塔



蘇州蟹

11月7日（水）

朝早く起き、上海へ向かう。
懐かしい蘇州駅である。
寒山拾得さんがいないかと、
きょろきょろしたが、
空気のように、あちこちに、
融け込んでいた。



巨大な蘇州駅



寒山拾得に会った待合室



この椅子に、背中合わせに、
座っていたのだった。

上海行き高铁、G列車、2等、40元、30分ほどで上海である。
上海駅から地下鉄1号線で人民広場まで行き、上海博物館に行く。



上海に着いたG列車

「上海博物館」 無料

書画が充実していた。
篆刻の歴史が学べる。
陶磁器も名品がそろっている。
書画は写真を撮ってはいけないようだ。
人が多くて、ゆっくり見ることができない。



博物館の中



博物館の中

博物館を出て、地下鉄2号線で南京東路で下車。朶雲軒へ。

「朶雲軒」

ここでお土産の墨を買ったが、
感じの良くない店であった。

南京東路から地下鉄2号線に乗り、浦東空港へ。
中国東方航空で深夜12時半頃、京都に無事到着。



上海博物館



朶雲軒